

【論文】

大学生における感動体験が自己効力感に及ぼす影響

畑下 真里奈*, 瀬戸 美奈子**

The Effects of "Kandoh Experience" on Self-efficacy in University Students

Marina Hatashita and Minako Seto

要 旨

本研究は、大学生を対象として感動体験が自己効力感に及ぼす影響について検討を行った。感動体験の構造を明らかにするために尺度を作成し、調査の結果、「対人関係による支援・気づき」「作品鑑賞・自然による発見・触発」「達成感」「一体感」の4因子構造であることがわかった。また、感動体験が自己効力感に影響を及ぼすことが支持された。

Abstract

The purposes of this study were to explain structure of "Kandoh experience" and to examine the effects of "Kandoh experience" on Self-efficacy. The structure of Kandoh experience could be explained 4 factors: support and awareness of human relations, finding and provocation of a work appreciation and nature, sense of achievement, sense of unity. And this study revealed that "Kandoh experience" effected Self-efficacy.

● ● ○ **Key words** 感動体験 Kandoh experience / 自己効力感 Self-efficacy / 大学生 university students

I 問題と目的

近年、子どもたちの自立心、思いやり、社会性、決断力などの欠如に加えて、いじめ、不登校などが大きな社会問題となってきた（斉藤・藤原，2003）¹⁾。斉藤・藤原（2003）は、子どもたちの日常生活は、家庭、学校、塾、ゲームセンターなどの狭い空間の中に限られており、生活体験、社会体験、自然体験などが不足し、「感情の希薄化」につながっていることを指摘している。諸体験の不足が生じる背景としては、子どもたちを取り巻く生活環境が核家族化、少子化、親の過保護など時代や社会的な影響を受けて変化し、そ

の結果、子どもたちの活動範囲は次第に狭められていることが推察できる。

この現状を受け、近年、自然体験などが与える影響についての研究（平野，1992；森谷，2009）²⁾³⁾ や体験活動を促す取り組みが繰り返されるようになってきた。しかし、ただ体験の機会を増やしただけでは「感情の希薄化」を防ぐには至らない。これらの体験が子どもたち自身の動機づけにつながる大きな意味を持たなければ、その場をやり過ごしたただけで変化は起きないからである。戸梶（2004）⁴⁾ は、人間に何らかの明確な変化を起こさせるような体験は、通常、強い情動喚起を伴った出来事であると考え、体験の意味につい

受付日 2011.9.14 / 受理日 2011.10.26

* 関西福祉科学大学大学院 社会福祉学研究所 心理臨床学専攻 学生 / ** 三重大学 教育学部 准教授

て以下の2点を指摘している。一つは、特に思春期や青年期においてなされる体験は、時としてその個人の人生において重要な転換点になることである。もう一つは、その情動が感動喚起プロセスと複数の類似点を持つことである。感動的な体験は、強い情動喚起がなされるため記憶に残りやすく、効果の持続性があると予測できる他、肯定的な体験であることから想起することで快い気分になれると考えられ、さまざまな望ましい効果が期待される(戸梶, 2004)。このことから、子どもたちの感情を豊かにするためには、単に体験をさせるだけではなく、心に残るような感動を伴うことが重要だと考えられる。子どもたちに感動的な体験をさせることは、子どもの成長を促進することにつながるといえるだろう。

管見によれば、感動に関する研究はまだ数が少なく、戸梶(2010)⁵⁾は「感動」は文学的表現であり、感動を表す単一の単語(名詞)が見当たらない英語圏と比較して、日本語における「感動」は感情の種類のいずれをも包含するという特徴を有していることを指摘している。斉藤・藤原(2003)は小中学生を対象とした調査において、「嬉しい」「楽しい」「ジーンときた」「美しい」「ワクワク」「悲しい」「悔しい」「苦しい」といった感情を味わった経験全てを感動体験としてとらえており、感動は複雑な混合感情であるといえる。そのため、一次元的な扱いや境界確定的定義になじまず、操作的、数量的研究には不利な性質があり(橋本・小倉, 2002)⁶⁾、感動体験の構造についても十分に検討されているとはいえない。

佐伯・新名・服部・三浦(2006)⁷⁾は、大学生への調査を元に、児童期用の感動体験尺度を作成している。戸梶(2004)の調査においては、感動体験は「思いやり」「新たな経験」「達成」といった多因子構造であることが予測されていたが、佐伯ら(2006)の研究では単因子構造という結果であった。佐伯ら(2006)は、分析において因子負荷量の低かった項目を削除した結果、項目数が11項目と数が少なく、因子を構成するまでに至らなかったことを理由としてあげており、感動体験の構造についてはさらに検討すべき課題であると述べている。また橋本・小倉(2002)は、大学生を対象とした調査から、これまで経験してきた感動経験の累積頻度を測定する尺度を作成しているが、感動の定義が曖昧であり、質問項目において「驚いた」「息

をのんだ」などの表現を用いるなど、作成された尺度が感動経験を捉えているかどうかという点に疑問が残る。そこで本研究は、回想した感動体験について言語化する能力のある大学生を対象とし、感動体験の構造を明らかにすることを第一の目的とする。

感動体験の効果について、佐伯ら(2006)は、児童期の感動体験が自己効力感・自己肯定感に影響を及ぼすことを報告している。自己効力感(Self-efficacy)とは、社会的学習理論あるいは社会的認知理論(Bandura, 1977)⁸⁾の中核をなす概念の1つであり、個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知を指す(成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995)⁹⁾。戸梶(2004)は、感動が喚起されることによって、動機づけや受容性を含む情動的側面と思考・メタ認知を含む認知的側面に大きな影響を及ぼすことを見出しており、自己効力や肯定的思考に影響していると述べている。感動体験という自らの直接的な行動が自己効力感を高めると推察できる。またBandura(1977)は、自己効力感には2つの水準があるとしている。1つは課題や特定の場面で特異的に行動へ影響を及ぼす自己効力感である。もう1つは、具体的な個々の課題や状況に依存せずに、より長期的に、より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感である。成田ら(1995)は後者を「特性的自己効力感」と名づけて、「特性的自己効力感尺度」を作成している。佐伯ら(2006)は自己効力感を測定する尺度として、先の特性的自己効力感尺度(成田ら, 1995)と、松尾・新井(1998)¹⁰⁾が作成した対人的自己効力感尺度から項目を選抜して使用し、感動体験が対人関係の調整や援助行動などに影響しているという仮説(戸梶, 2004)を検証するための調査を行なった。調査の結果、自己効力感は単因子構造であった。これについて佐伯ら(2006)は、児童期において自己の行動に関する特性的自己効力感と対人場面で働く対人的自己効力感は同一次元であり、自己効力感の高い児童はどちらの項目にも高い反応を示すために2因子構造にならなかったことを理由として挙げている。

感動体験は日常生活におけるさまざまな場面での経験であり、石井・内藤(1991)¹¹⁾は感動体験が「充実した生活」という場面を特定しない生活全般に影響していることを報告している。また感動体験の実践報告においても「思いを周りに伝える意欲」「友達

と協力して生活できる力」といった、日常場面への影響が指摘されている（北海道教育大学附属旭川幼稚園, 1998）¹²⁾。そこで本研究では、感動体験が状況や場面を特定しない、日常生活における特性的自己効力感へ及ぼす影響について検討することを第二の目的とする。

なおここで述べる「感動」とは、戸梶（1999）¹³⁾を参考に、ある事象において期待以上の結果が示された時に生じる情動とする。

II 方法

調査対象者

K大学の1回生から4回生208名（男性80名、女性128名、1回生44名、2回生68名、3回生78名、4回生18名）を対象とした。

調査時期

2010年11月に行った。

調査用紙

フェースシート、感動体験尺度、特性的自己効力感尺度で構成された質問紙を用いた。

フェースシート

性別、年齢、学年、所属学科を尋ねる項目から構成した。

感動体験尺度

感動体験尺度はこれまでに児童用感動体験尺度（佐伯ら, 2006）、青年期版感動体験尺度（橋本・小倉, 2002）が作成されている。佐伯ら（2006）の感動体験尺度は項目数が少なく、また対象が児童であるために、大学生の生活経験にそぐわない項目が多かった。橋本・小倉（2002）の感動体験の累積頻度を測定する尺度は、質問項目の文章に「驚いた」「息をのんだ」などの表現を用いており、これらの表現が明確に感動体験を捉えられているかという疑問が残ったため使用しなかった。そこで本研究では先行研究を参考に、新たに作成した感動体験尺度を用いた。尺度の作成は、大学生71名（男性32名、女性39名）を対象に、大学の講義時間を使用して今までに感動した経験を自由記述で最大3つまで回答を求め、得られた感動体験エピソード191件を戸梶（2004）、楠本・長ヶ原（2004）¹⁴⁾の研究を参考に整理した。その結果、感動体験は感動の対象

をベースに「対人関係」「余暇活動」「ライフイベント」の3カテゴリーに分類された。さらに「対人関係」と「余暇活動」には、下位概念として「思いやり・愛情」（「対人関係」のみ）他、「一体感」「懸命さ」「新たな経験」「考え方」「達成」という事象別に分類され、感動体験は計12カテゴリーに分類することができた（Table1）。各カテゴリーに分類されたエピソードを整理し、質問項目を作成した。その際、大学生6名と大学教員1名とで内容的妥当性の検討を行った。回答は4件法で、「まったくない」から「よくある」までとした。

特性的自己効力感尺度

成田ら（1995）が作成した特性的自己効力感尺度を、現代の大学生に適用するように表現を修正し、大学生6名と大学教員1名とで内容的妥当性の検討を行ったものを使用した。回答は5件法で、「あてはまらない」から「あてはまる」までとした。

手続き

質問紙を大学の講義時間に配布、回収した。回答時間はおよそ10分であった。

Table1 感動体験の分類

対象	事象	代表的な事例
対人関係	思いやり・愛情	友達が優しい言葉をかけてくれた サプライズプレゼントをくれた
	達成	自分が何かをやり遂げた(付き合うなど) 結婚式
	新たな経験	自分のことを覚えてくれた 自分のことを高く評価してくれた
	考え方	周囲の人のありがたさに気づいた
	一体感	友人に受け入れられている
	懸命さ	友達が努力している姿を見た 親身になって話を聴いてくれた
余暇活動	達成	大会で優勝できた コンクールで入賞した
	新たな経験	好きな音楽を見つけた 景色がきれいだった
	考え方	映画やドラマから影響を受けた 本の中でためになる言葉を見つけた
	一体感	グループ活動でひとつのものを作り上げた みんながひとつにまとまっていると感じた
	懸命さ	映画やテレビで見た スポーツ選手の頑張りをみた
	ライフイベント	受験に合格した 資格試験に合格した 内定をもらった 卒業式

Ⅲ 結果

1. 感動体験尺度の因子分析

感動体験尺度について、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。次に因子負荷量が .40 以下の項目を削除し、再度分析を行った (Table2)。その結果、感動体験尺度は4因子構造であることがわかった。次に各因子の主な項目と因子負荷量を挙げる。第1因子には「辛い時に身近な人が励ましてくれた (.86)」や「自分を支えてくれている人のありがたさに気づいた (.77)」という項目が含まれていることから、「対人関係による支援・気づき」と名づけた。第2因子には「歌詞・詩・文学作品・マンガの中で自分にとって大切なものを見つけた (.75)」や「映画やドラマを見た (.53)」という項目が含まれていることから、「作品鑑賞・自然による発見・触発」と名づけた。第3因子は「自分が大会や試合で好成績をおさめた (.61)」といった目標を達成した経験が含まれていることから

「達成感」と名づけた。第4因子は「みんながひとつにまとまっているのを感じた (.72)」と他者との一体感を感じた経験が含まれていることから「一体感」と名づけた。

次に、本尺度の信頼性を検討するため、各因子の Cronbach の α 係数を算出した。その結果、 $\alpha = .93$ から .58 までの、ある程度の信頼性が得られた。第3因子の「達成感」は $\alpha = .58$ であり、2項目で構成されているが、佐伯ら (2006) の研究では、自己効力感に影響を与える感動経験として、達成感を伴う経験が指摘されていることから因子として採用した。感動体験のメカニズムについて検討した戸梶 (2004) の研究では、感動した事象として達成に関する項目をあげた調査者が多かったことが報告されており、達成は感動体験に必要な要素であるといえる。また、第4因子の「一体感」も2項目で構成されているが、楠本・長ヶ原 (2004) の研究では、主な感動場面として「他者との一体感を得る場面」や「他者同士が一体となる姿を見る場面」を挙げており、速水・陳 (1993)¹⁵⁾ の研究では、「学園祭でみんなであんみつやぜんざいの仕込みを夜遅くまでして優秀賞をとる」や「文化祭で夜遅くまで残り皆で作品を完成させた」などの感動体験を「協同の喜び」として分類していることから因子として採用した。戸梶 (2004) の研究においても一体感が感動した事象に挙げられており、感動体験に必要な要素であるといえる。

また4因子間の相関は低から中程度の正の相関であった。「対人関係による支援・気づき」は「作品鑑賞・自然による発見・触発 (.45)」「達成感 (.44)」「一体感 (.52)」において中程度の正の相関を示した。

Table2 感動体験尺度の因子分析 (主因子法・プロマックス回転後)

	因子				
	F1	F2	F3	F4	共通性
第1因子 対人関係による支援・気づき ($\alpha = .93$)					
辛い時に身近な人が励ましてくれた	.86	-.07	.00	.04	.72
身近な人が他人のために一生懸命になっている姿を見た	.80	-.02	-.07	.02	.61
身近な人が優しい言葉をかけてくれた	.78	.01	.09	-.06	.63
身近な人から大切なことを学んだ	.78	.10	-.16	.10	.69
身近な人が自分のことを受け入れてくれた	.77	.00	.01	-.09	.54
自分を支えてくれる人のありがたさに気づいた	.77	-.03	-.12	.16	.65
身近な人の言葉の中に自分にとって大切なものを見つけた	.74	.02	-.14	.09	.56
身近な人が親身になって話を聞いてくれた	.66	-.01	.11	-.05	.47
身近な人が自分を高く評価してくれた	.66	.10	.21	-.24	.54
身近な人が頑張っている姿を見た	.64	.07	-.17	.19	.54
久しぶりに会った人が自分のことを覚えていてくれた	.63	-.17	.03	.05	.37
身近な人がサプライズプレゼントをしてくれた	.44	.02	.32	.02	.45
第2因子 作品鑑賞・自然による発見・触発 ($\alpha = .72$)					
歌詞・詩・文学作品・マンガの中で自分にとって大切なものを見つけた	-.05	.75	-.04	-.02	.50
音楽を聴いた	-.01	.68	-.17	.00	.42
映画やドラマを見た	-.10	.53	.08	.18	.35
新しい考え方に触れた	.04	.52	.05	.06	.34
自然の雄大さを感じた	.08	.42	.22	-.12	.29
第3因子 達成感 ($\alpha = .58$)					
自分が大会や試合で好成績をおさめた	.03	-.06	.61	.21	.48
資格試験に合格した	-.16	.01	.49	.17	.24
第4因子 一体感 ($\alpha = .89$)					
みんながひとつにまとまっているのを感じた	.12	.00	.23	.72	.78
みんなで協力して何かを成し遂げた	.08	.06	.23	.68	.71
寄与率 39.8 9.3 7.0 5.2					
因子間相関					
F1	1				
F2	.45	1			
F3	.44	.27	1		
F4	.52	.31	.22	1	

2. 特性的自己効力感尺度の因子分析

成田ら (1995) が作成した特性的自己効力感尺度は13歳から92歳までのサンプルデータを使用しているが、調査対象者の年代に適した尺度であるかどうかの検討が必要だと指摘している。今回の調査対象者は大学生であり、成田ら (1995) の研究とは年齢群が異なっている。また大学生に適用するように表現を修正したこともあるため、本研究では改めて主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。次に因子負荷量が .40 以下の項目を削除し、再度因子分析を行っ

Table3 特性的自己効力感尺度の因子分析
(主因子法・プロマックス回転後)

	因子			
	F1	F2	F3	共通性
第1因子 困難場面の作業遂行・対処行動 ($\alpha = .90$)				
困難に出会うのを避ける*	.81	-.15	.02	.58
思いがけない問題が起こった時、それをうまく処理できない*	.80	-.17	.02	.55
何かしようとする時、自分にそれができかどうか不安になる*	.78	-.35	.09	.53
すぐにあきらめてしまう*	.63	.34	-.17	.62
重要な目標を決めても、出だしてつまづくとすぐにあきらめてしまう*	.63	.19	-.05	.52
何かを終える前にあきらめてしまう*	.62	.22	.05	.62
重要な目標を決めても、めったに成功しない*	.61	.07	.19	.59
面倒だと感じることにわざわざ手を出そうとは思わない*	.57	.11	.00	.39
友達になりたい人でも、友達になるのが大変ならばすぐにやめてしまう*	.55	.16	.22	.61
難しそうなのは学ぼうとは思わない	.53	.23	-.11	.40
しなければならないことがあっても、なかなか取りかからない*	.49	-.13	-.08	.16
第2因子 忍耐強さ ($\alpha = .70$)				
失敗した時でも一生懸命やろうと思う	-.19	.75	.15	.49
初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける	-.01	.72	.01	.52
面白くないことをする時でも、それが終わるまで頑張る	-.11	.63	-.08	.34
第3因子 対人関係形成 ($\alpha = .80$)				
自分から友達を作るのがうまい	-.05	.02	.86	.70
新しい友達を作るのが苦手だ*	.06	.01	.76	.63
寄与率 40.4 12.5 7.0				
因子間相関				
	F1	F2	F3	
F1	1			
F2	.51	1		
F3	.59	.16	1	

*のついている項目は逆転項目であり、得点は反転してある。

た (Table3)。その結果、特性的自己効力感尺度は3因子構造であることがわかった。次に各因子の主な項目と因子負荷量を挙げる。第1因子には「困難に出会うのを避ける (.81)」や「思いがけない問題が起こった時、それをうまく処理できない (.80)」という項目が含まれていることから、「困難場面の作業遂行・対処行動」と名づけた。第2因子には「失敗した時でも一生懸命やろうと思う (.75)」や「初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける (.72)」という項目が含まれていることから、「忍耐強さ」と名づけた。第3因子には、「自分から友達を作るのがうまい (.86)」と「新しい友達を作るのが苦手だ (.76)」という項目が含まれていることから、「対人関係形成」と名づけた。

次に、本尺度の信頼性を検討するため、各因子のCronbachの α 係数を算出した。その結果、 $\alpha = .90$ から.70であり、ある程度の信頼性が得られた。第3因子の「対人関係形成」は2項目で構成されているが、佐藤 (2005)¹⁶⁾の研究では、同じ特性的自己効力感尺度から「対人関係の自己効力感」があるという結果が得られていることから因子として採用した。

3因子間の相関は、低から中程度の正の相関であった。中でも、「困難場面の作業遂行・対処行動」は「忍

耐強さ (.51)」と「対人関係形成 (.59)」において中程度の正の相関を示した。思いがけない問題が起こった時に、問題に対処できるという自己効力感と、最後まで頑張ったり、対人関係を築く際にも上手に対処できるという自己効力感は相互に関連していることが示唆された。

3. 下位尺度間相関の検討

感動体験尺度と特性的自己効力感尺度の下位尺度間の相関を分析した (Table4)。その結果、「作品鑑賞・自然による発見・触発」と「対人関係形成」間を除くすべての下位尺度間に有意な正の相関がみられた。感動体験尺度の「一体感」は特性的自己効力感尺度の「対人関係形成」($r = .33$)「忍耐強さ」($r = .36$)「困難場面の作業遂行・対処行動」($r = .35$)と正の相関を示した。感動体験尺度の「対人関係による支援・気づき」は特性的自己効力感尺度の「忍耐強さ」($r = .37$)と「困難場面の作業遂行・対処行動」($r = .36$)と正の相関を示した。

Table4 感動体験尺度と自己効力感尺度の単相関係数

	対人関係形成	忍耐強さ	困難場面の作業遂行・対処行動
達成感	.14*	.19**	.28**
一体感	.33**	.36**	.35**
作品鑑賞・自然による発見・触発	.07	.28**	.15*
対人関係による支援・気づき	.27**	.37**	.36**

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

4. 感動体験が自己効力感に与える影響の検討

特性的自己効力感を従属変数とし、感動体験を独立変数とした重回帰分析 (強制投入法) を行った (Table5)。その結果、「一体感」は「対人関係形成 (.28)」「忍耐強さ (.18)」に影響していた。「対人関係による支援・気づき」は「忍耐強さ (.20)」「困難場面の作業遂行・対処行動 (.22)」に影響していた。「達成感」は「困難場面の作業遂行・対処行動 (.15)」に影響していた。「作品鑑賞・自然による発見・触発」は「忍耐強さ (.14)」に影響していた。このことから感動体験が特性的自己効力感に影響を与えていることが示唆された。

Table5 特性的自己効力感を従属変数とし
感動体験を独立変数とした重回帰分析

独立変数	対人関係形成	忍耐強さ	困難場面の作業遂行・対処行動
達成感	.01	.03	.15*
一体感	.28***	.18*	.06
作品鑑賞・自然による発見・触発	-.08	.14*	-.02
対人関係による支援・気づき	.14	.20*	.22**
R ²	.13	.18	.18

***p<.001 **p<.01 *p<.05

IV 考察

本研究は、大学生を対象に感動体験の構造を明らかにし、感動体験が自己効力感に及ぼす影響を検討するものであった。ここでは感動体験と特性的自己効力感尺度の構造と、感動体験が自己効力感に及ぼす影響について述べる。

1. 感動体験の構造

感動体験尺度は、因子分析の結果から、「対人関係による支援・気づき」、「作品鑑賞・自然による発見・触発」、「達成感」、「一体感」の4因子で説明できた。このことは達成感・充実感・人間関係における情緒的交流に関わる事柄に対して感動が生じやすいという戸梶（1997）¹⁷⁾の感動生起状況に関する調査結果と一致する。また戸梶（1998）¹⁸⁾は、感動生起の特徴として、事象に至るまでのプロセスや事象に対する関与の程度などといったストーリー性を挙げているが、同時にストーリー性が明白に見出せない「雄大な自然や素晴らしいパフォーマンスへの感動」があることも明らかにしている。これは本研究の感動体験尺度において、「対人関係による支援・気づき」「達成感」「一体感」というストーリー性があるものと、事象そのものに対する感動である「作品鑑賞・自然による発見・触発」が含まれている点と一致する。感動体験尺度の作成において行った予備調査では、感動体験は12カテゴリーに分類されたが、因子分析では4因子となった。これは、予備調査において対象と事象によるカテゴリー分類を行ったが、因子は事象を中心に構成されていたからである。「達成感」「一体感」はそれぞれ事象として独立し、「対人関係による支援・気づき」「作品鑑賞・自然による発見・触発」はその他の事象が相互に集まった結果といえよう。また、類似の体験であっても感動の理由

は人によって異なることが想定される。感動した理由を含めての分類も視野にいれて（戸梶, 2004）、尺度の項目について再検討し、感動体験の構造について分析していくべきであろう。

2. 特性的自己効力感尺度の構造

特性的自己効力感尺度は大学生を対象とした本研究では、「困難場面の作業遂行・対処行動」「忍耐強さ」「対人関係形成」の3因子構造であった。特性的自己効力感を使用した佐藤（2005）の大学生を対象とした研究においても、「対人関係の自己効力感」「問題処理の自己効力感」「困難場面の自己効力感」「作業遂行の自己効力感」「忍耐強さの自己効力感」という5因子構造であり、多因子構造であるという結果が得られている。佐藤（2005）の因子分析から得られた「問題処理の自己効力感」「困難場面の自己効力感」「作業遂行の自己効力感」の3因子が、本研究においては「困難場面の作業遂行・対処行動」としてまとまったために、3因子構造となったと考えられる。

13歳から92歳までの幅広い年齢群を対象に調査を行なった成田ら（1995）の研究では、特性的自己効力感単因子構造であったが、大学生においては多因子構造であり、年齢群によって構造が異なることが示唆された。親しい人間関係や円滑な人間関係を築くことは青年期の課題の一つであり（吉岡, 2001）¹⁹⁾、大学生にとって、問題が起こった場面で対処したり、課題にあきらめずに取り組むことと、人間関係を調整できることは別のものとして意識されているといえる。

3. 感動体験が自己効力感に及ぼす影響

特性的自己効力感尺度の「対人関係形成」には感動体験尺度の「一体感」が影響していた。つまり、一体感を感じるという情緒的交流の経験が、新たな関係においても自分は良い人間関係を構築できるという自己効力感に結びつくことが考えられる。

「忍耐強さ」には「一体感」「作品鑑賞・自然による発見・触発」「対人関係による支援・気づき」が影響していた。「一体感」については、時間や空間を共有している時に、仲間がいることで支えられていると感じた経験が、苦手なことでもやり遂げようという意識

に結びついたと考えられる。「作品鑑賞・自然による発見・触発」については、作品鑑賞時に発見した考え方や触発された内容が想起されることによって、今までと異なる別視点からものを見ることができ、失敗した場面やうまくいかない場面でも工夫できるようになることが忍耐強さを支えていると考えられる。戸梶(2004)は、感動体験による心理的変容として、新しい考えや価値観に触れたり、これまでにない経験をしたりして考え方の変化や視野が広がるといった「認知的枠組みの更新」を示唆しており、本研究の今までと異なる別視点からものを見ることができるといった視点と一致する。「対人関係による支援・気づき」については、自分には応援してくれたり、支えてくれる人がいることを感じる事が、物事をやり遂げようという意識に結びつき、忍耐強さを高めると考えられる。

「困難場面の作業遂行・対処行動」には「達成感」と「対人関係による支援・気づき」が影響していた。「達成感」については、何かを成し遂げたという実感が、難しいことでもやればできるという自己効力感に結びつくことが考えられる。戸梶(2004)は、感動体験による心理的変容として、自身もしくは他者の努力が報われることを通して、次も頑張る、自分も努力するという「動機づけの向上」を示唆しており、本研究の感動体験が自己効力感に影響を及ぼすという結果と一致する。「対人関係による支援・気づき」については、「忍耐強さ」への影響と同様に、自分には応援してくれたり、支えてくれる人がいることを感じる事が、困難な場面でも逃げ出さずに挑戦できるという自己効力感に結びつくことが考えられる。

最後に本研究の今後の課題としては、次の2点が挙げられる。第一は、感動体験尺度は今回、大学生による自由記述をもとに作成したものである。今回の研究結果からこの尺度がある程度使用できることがわかったが、尺度の妥当性についてさらに検討が必要である。第二は、今回の調査は感動体験の頻度を問うものであったが、感動体験が自己の変容に与える影響については、小さな感動体験を多数しているよりも、たとえ1つであったとしても、大きな感動体験を経験している者の方が心理的変容をより明確に実感しているということが調査によって示されている(夏目・戸梶・橋本, 2005)²⁰⁾。感動体験を個人が

どのように受け止めているかという視点から、検討していくことが必要といえる。

付記

本研究は、卒業論文を加筆・修正したものである。

謝辞

本研究の調査にあたり、特性的自己効力感尺度を拝借させていただいた関西学院大学の成田健一先生のご厚意に感謝致します。また、2010年度瀬戸ゼミの皆さま、調査にご協力いただいた学生の皆さまに心より感謝致します。

引用文献

- 1) 齊藤哲瑯・藤原昌樹(2003)子どもたちの地域活動や感動体験等に関する調査研究 川村学園女子大学研究紀要, 14(1), 153-176.
- 2) 平野吉直(1992)子どもの自然・生活体験と生活態度との関連 日本体育学会大会号, 43(B), 692.
- 3) 森谷直樹(2009)自然体験活動が幼児にもたらす影響について 文化女子大学室蘭短期大学研究紀要, 32, 26-43.
- 4) 戸梶重紀彦(2004)『感動』体験の効果について一人が変化するメカニズム— 広島マネジメント研究, 14, 27-37.
- 5) 戸梶重紀彦(2010)感動と心理的変容 感情と思考の科学事典, 290-291.
- 6) 橋本巖・小倉丈佳(2002)青年期における感動経験と共感性の関係 愛媛大学教育学部紀要 教育科学, 48(2), 57-73.
- 7) 佐伯怜香・新名康平・服部恭子・三浦佳世(2006)児童期の感動体験が自己効力感・自己肯定意識に及ぼす影響 九州大学心理学研究, 7, 181-192.
- 8) Bandura, A (1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 2, 191-215.
- 9) 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子(1995)特性的自己効力感尺度の検討 教育心理学研究, 43(3), 306-314.
- 10) 松尾直博・新井邦二郎(1998)児童の対人不安傾向と公的自己意識 対人的自己効力感との関係 教育心理学研究, 46, 21-30.
- 11) 石井生滋・内藤勇次(1991)青年期における感動体験に関する研究 日本教育心理学会総会発表論文集, 33, 423-424.
- 12) 北海道教育大学附属旭川幼稚園(1998) V.総合考察(「生きる力」の知力を育む: 個が求める知的好奇心や探求心

のめざめ) 研究紀要, 81-82.

- 13) 戸梶亜紀彦(1999)感動に関する基礎的研究(3) 日本発達心理学会第10回大会発表論文集, 170.
- 14) 楠本恭子・長々原誠(2004)大学生の「感動」に影響を及ぼす要因に関する質的・量的研究 神戸大学発達科学部研究紀要, 11(2), 73-82.
- 15) 速水敏彦・陳恵貞(1993)動機づけとしての自伝的記憶—感動体験の分析から— 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, 40, 89-98.
- 16) 佐藤祐基(2005)自己効力感,不合理な信念,大学生活不安に関する因果モデルの検証 北方圏生活福祉研究所年報, 11, 53-60.
- 17) 戸梶亜紀彦(1997)感動に関する基礎的研究(1) 日本発達心理学会第8回大会発表論文集, 227.
- 18) 戸梶亜紀彦(1998)感動に関する基礎的研究(2) 日本発達心理学会第9回大会発表論文集, 30.
- 19) 吉岡和子(2001)「自分らしさ」と友人関係の満足感との関連について 日本教育心理学会大会発表論文集, 43, 462.
- 20) 夏目智代・戸梶亜紀彦・橋本宰(2005)感動体験が生き方に及ぼす影響について(1)—生き方尺度および自己肯定意識尺度との関連性 日本心理学会第69回大会発表論文集, 1052.